

# 「平和論を懐けるものは 大声咤呼して民心に訴えるべし」 — 札幌農学校生の非戦論 — 札幌農学校第二十三期生 川嶋一郎



川嶋一郎  
Kawashima Ichio

日露関係が緊迫していた一九〇三年九月、札幌農学校第二期生の内村鑑三は、自身の主宰する『聖書之研究』において、非戦論を主張して世論に挑戦した。一方、内村の後輩にあたる札幌農学校生たちも、学内で日露関係論を論じていた。

一九〇三年一〇月二〇日、札幌農学校本科二年の川嶋一郎（二八八〇〜一九七六、一九〇六年七月本科卒業、後に岩手県三戸郡福岡町長）は、日記に次のように書き留めている。

▼「夜は遊戯の後ち日露戦争の可否論となり盛の議論なりしが、余は恐露病者と做されたり」（『明治三六年当用日記』以下、句読点・濁点等を適宜附した）

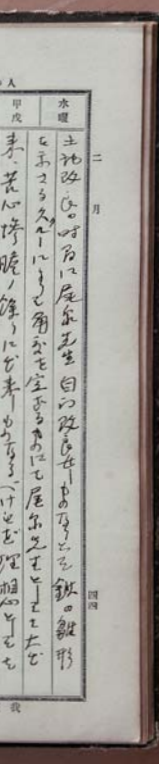
「私はこの頃「トルストイ」の崇拜者であった。トルストイの著書は片つ端から丸

善の『学燈』を見ては買い込んだ。まだ邦訳書のでない頃で、英訳書計りであった」（『吾が半生の思い出』六四頁）という川嶋一郎にとつて、ロシアは文学を通して親密さと憧れを抱く存在であった。トルストイの『復活』『人生論』『我宗教』等を愛読し、実家からの仕送り金が月一五円にもかわらず、一月二三日には『戦争と平和』等を取り寄せるため、東京の教文館に六四七〇銭の為替を組むほどであった。「トルストイに心酔して（略）無抵抗主義、平和主義に対しても教えられるところが多かった」（『徳草 後篇』三五頁）という。

しかし、翌年二月八日、日露関係は一触即発の事態に陥り、川嶋一郎は次のように日記に記した。

▼「料理屋の二階より例の方歳やらんを聞く。号外の鈴の音も急

がしげ二走るを見て、又何にか大事でもあ



日露戦争期の札幌農学校生（1904年6月）  
藻岩山を背景に左端が川嶋一郎、右端が足助素一（大学図書館蔵）

りしかと宿二帰りに号外を借りて見るに（略）公使引上げ等の不穏の記事あり。戦争も弥々迫まりし模様なり。日本国民は大和魂とやらをふり起して狂するなるべけれど、剣を以て立つものは剣を以て亡ぶ人の子の教を信ずるものは同情の念を起す能はず。噫、吾れ之の人々の間二立ちて如何なる行動をとらんか、余は真三盲目たるなり」（『明治三十七年当用日記』）

二日後の二月一〇日、遂に、日露は戦端を開いた。

▼「人々の話によれば、已二平和破れて露国軍艦は沈没し、我軍旅順港を攻撃中なりとか（略）已二平和望むべからず、鉄火相見ゆるの止むを得ざる二至りし上は吾れ又何を可言はん、唯だその悲しむべき報酬を謹んで待ち以て後世子孫の鑑として平和光栄を望ましむべきのみ」

Litterae Populiとはラテン語で「ポプラの手紙」という意味です。北海道大学（および、その前身である札幌農学校）にゆかりのある人々の言葉を「リテラポプリ」としてお届けします。

目次

リテラポプリ ..... 2

「平和論を懐けるものは  
大声喧呼して民心に訴えるべし  
—札幌農学校生の非戦論—  
札幌農学校第二十三期生 川嶋一郎  
大学文書館 山本美穂子

特集：北大は「がん」に立ち向かう ..... 4

がんと向き合う現場の最前線

北海道大学病院 加藤 元嗣  
小松 嘉人

一人ひとりに最高の医療を

医学研究科 近藤 哲  
秋田 弘俊

連携する最先端医療

医学研究科 玉木 長良  
白土 博樹

ミクロの世界で果敢に挑む

薬学研究院 松田 彰  
遺伝子病制御研究所 高田 賢藏

松野 吉宏 / 小野塚美香 / 田巻 知宏  
蔵田 伸雄 / 石川 正純

施設探訪 ..... 15

低温科学研究所低温実験室

広報課 三分一 利恵

虫と石⑧ ..... 16

エゾケシガムシ

総合博物館 大原 昌宏

トパーズ(黄玉)

総合博物館 松枝 大治

もういちど北大と出会う(その十七) ..... 18

アラスカで北大と出会う

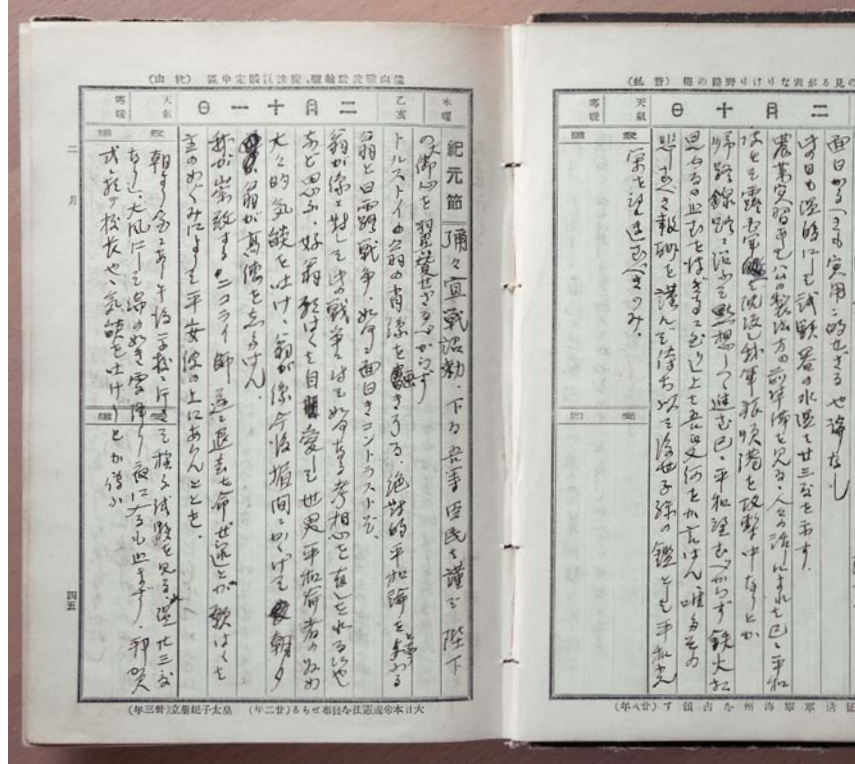
低温科学研究所 兒玉 裕二

information ..... 19

建築設計図が語る北大の歴史(第18回) ..... 20

医学部基礎医学実験研究室(中棟)

工学研究科 池上 重康



札幌農学校在学中に川嶋一郎が綴った日記(1904年2月11日の条)。開戦日、川嶋一郎は部屋に掲げた、自筆のトルストイの肖像画に向かって「世界平和論者のため大々の気概を吐け」と祈った。(大学文書館蔵)

その後も、川嶋一郎は日露関係を憂い、黙想を続けて日記に綴った。

▼「宣戦詔勅は決して喜ぶべきことに非らず。世界平和の爲め、人道の爲め、悲しむべきことなりとせば、戦勝豈にべん舞して欣ぶべき事ならんや。米国南北戦争は世界の義軍なりしと称せらる。然れども戦勝てリンコロンが満面の笑を見しものなく、市民の行列を聞かざりき。之れ名は正義の戦なりと

も、行は神の道ニそむき、目を以て目をつぐなへ、齒を以て齒をつぐなへりしかばなり。嗚呼、東洋君子国の愛国者よ、汝等が目には神の怒り見へざるか、人道の念存せざるか、亡びに至るを知らずして徒ニ戦勝の甘きに酔へるものは禍なるかな(二月一三日の条)

三月三日には、川嶋一郎は、同じく平和論者であった親友の足助素二(一八七八〜一九三〇、一九〇四年七月森林科卒業、後に出版社「叢文閣」創業)と「時局問題ニ就て大激論」をなし、激論は翌四日も続いた。

▼「足助氏は現今は人民皆な戦争熱ニ狂せるときなれば沈黙を守りて寧ろ平和に復して平静ニ判断を下し得る時期を待つて平和論をとらざるを良しと云ひ、余は然らず、反て堂々平和論を懐けるものは此の際

二人の平和論に対する想いはむなしく、日露戦争は次第に激化していった。その後、本科三年に進級した川嶋一郎は、畜産学を専攻して実験や卒業論文の準備に追われる日々を送り、非戦論を唱える姿を「日記」に綴ることはなかった。

しかし、「私は無論、そのときは平和主義者と目されてゐたし、自分でも戦争には反対であった。だから日露戦争時代には一度も出征兵の出発を停車場に歓送したことはなかった」(『吾が半生の思い出』八〇頁)という。札幌農学校第二十三期生の川嶋一郎は非戦論を貫いていた。

大学文書館 山本美穂子  
Yamanoto Mitsuho